学校教育における学習の生成と自己言及性に関するフィールド研究

B4H002　本 山 方 子

主査　髙田文子　　**副査**　無藤 隆　汐見稔幸　尾見康博

１．問題の所在

本論文の目的は、学校の教育実践において「学習」はいかに生成されるのかという問題について、フィールド調査に基づき明らかにすることである。「学習」の生成は、活動自体の形成と活動の自己言及的システムとの相克として論じうるか検討した。

近年、教育実践における学習の議論は、新ヴィゴツキー学派を中心に社会文化的アプローチや状況論が牽引してきた。どちらも社会的存在として主体を扱い、社会的環境や文化的環境を学習の資源とし、特定の状況や文脈において学習が生起するとする。状況論では、学習を文化的実践共同体への「参加」であるとし、社会文化的アプローチでは、学習は言語などの文化的道具や他者に媒介されて社会文化的に構成されると論じてきた。研究者は積極的に教育現場に赴き、フィールド調査を行い、多様で個性的な活動に学習としての意味をみいだしてきた。

但し、社会文化的アプローチは、これまで見逃されていた事象に対し、積極的に学習としての意味を内実とともにみいだす一方で、そもそもその事象が学校という場でなぜ「学習」となり、維持され継続されるのか、という問いには応じられていない。

学校教育の実践においては、当事者にとって「学習」は多義的である。すなわち、活動自体を「学習」と呼ぶこともあれば、一連の経験に対して「学習」と命名することもある。「生活」の対として「学習」を用いることもあれば、「学習」の使用には評価実践が伴われたりする。つまり教育実践における「学習」はそれ自体が多義的であり、ある場面でどの意味がより強調されるのかということについては文脈依存的である。しかし、その点を理論的に補足することが難しい。ここに、学術の理論として一義的に語られる「学習」と、学校現場において多義的文脈依存的に用いられる「学習」との間に、差異や不整合が依然としてあり続けるという問題がある。

２．本研究の課題

そこで、本論文では、学習が多義的文脈依存的に用いられる現象そのものを包括的に捉え、学校の教育実践における「学習」の生成とはいかなることかということを問うこととした。

本研究の課題は、一つには、主体の活動の過程や発達的変化という形成的側面と、なぜ学校という場に応じて活動が生起し、変容しつつ維持、継続されるのか、というシステム産出の側面を、同じ事象に対してみいだすことである。

二つには、実践や活動の形成と、維持･継続のシステムを包括的に捉えるには、どのような方法やアイディアが有効なのか、検討することである。子どもや教師は主体として活動するだけでなく、活動の意味をみいだし、みいだされる存在でもある。フィールド観察を行う調査者の存在にも着目して、学習というシステムの複雑性の縮減における、フィールド調査者の機能を含めて論じることとした。

これらの課題に応えるために、本論文では、「学習」を、為されていない状態から価値あることが為されるに至る形成的な側面と、それが学校という場において自己産出する社会システムとしての側面との相克として捉える。この相克とは、形成とシステムとの抜き差しならない相補性を指す。つまり、本研究の中心的な目的は、学習の形成には自己産出システムが埋め込まれているという物言いと、学習の自己産出システムはその形成作用において可視化されるという物言いのどちらも成り立つものとして「学習」を捉え、この事態を総称して「生成」と呼びうることを明らかにすることである。

３．理論的アイディア

本研究では、学習の形成については、微視発生的に活動の内実を論述するために、社会文化的アプローチを用いることとした。また、学習を自己産出するシステムとして論じるために、自律的なシステムのありようを示す自己言及性（self-reference）に着目した。Luhmann（1990）においてシステムとは「複雑で変化しうる環境において内／外の区別を安定化することによって、自己を維持する同一性」である。環境のカオス的な複雑性がシステム内部に取り込まれるとき、システムが不安定化することへの対処として複雑性を縮減する。学校教育においては子どもが学べる程度に環境や内容、学習形態などの複雑性を縮減する。その際に、学校における学習の境界が自己言及的に産出される。そして、コミュニケーションや活動展開の可能性について、「今」為されている行為や活動が参照され、自己言及的にその確かさが確認される。その確かさが「意味」であり、意味が境界を産出させるともいえる。

本論文では、活動の形成と同時に、活動の自己言及性として活動あるいは学習がどのように規定され境界づけられていくのか、その規定や境界づけがどのようにシステムに影響し、それを維持、継続させるのか、ということを論じた。

システム論の中で着目した一つに、ダブル・コンティンジェンシー（double contingency：二重の偶有性）という問題がある。すなわち、自分の行為次第で、相

手がどのような行為をとるのかが決まり、相手の行為次第で自分の行為が決まるため、自他の行為は相互に依存しており、その結果、双方の行為が起こりえない、という問題である(Luhmann, 1993/1995)。ダブル・コンティンジェンシーの克服は、自主学習のように不定型で偶発的な活動を伴う「学習」が主体の個性を保持しつつ、集団の文化的作用を可能にしている点にみられた。もう一つには、観察システムの問題がある。教育実践に没入する当事者の観察システムの作動は、別の観察システムの作動によって見ることができる。本論文では、当事者の観察システムと調査者の観察システムとの交差によって、一連の事象が取り出され、意味づけられ、名づけられることによって「学習」となることを論じた。

４．論文の構成

第一部「本研究の課題と方法」

第一部では研究の目的と理論的枠組み、方法論を扱った。

第Ⅰ章では「問題の所在と本論文の目的」を述べた。第Ⅱ章「本研究における理論的枠組み」では、学校の教育実践における学習の多義性と文脈依存性を提起し、それに対する社会文化的アプローチの貢献と課題を述べ、自己言及性に着目する理由を論じた。ここでは自己言及性のほか、ダブル・コンティンジェンシー、観察システムなどのアイディアを取り上げ、学習の生成について、活動の形成と活動システムの自己言及性との相克が理論的課題となることを提示した。

調査手法としてはエスノグラフィを採用した。学習の形成過程とシステムの自律的動態を同時に捉えるには、学校の教育現場を参与観察し、出来事の生起に立ち合い、微視発生的に変化を追える点で、効果的だと判断した。但し、本研究の立場では、フィールドワークもまた「活動」と呼ばれる事象であり、フィールド調査にも自己言及性が伴う。学校教育における「学習」の意味付与者の一人となるフィールド調査者は、自らの調査活動の自己言及性にも自覚的であらねばならない。そこで、第Ⅲ章「方法としての教育実践のエスノグラフィ」では、フィールドワークの認識論と、教育実践のフィールド調査者のポジショニングを論じ、第二部でエスノグラフィを描く筆者の立ち位置を明らかにした。

第二部「教育実践のエスノグラフィ」

第二部は、教育実践に関する５本のエスノグラフィによる各論である。

第一に、第Ⅳ章で「学習」のフレーミングを論じた。教育現場で生起する諸事象から、当事者はどのように「学習」という事象を境界づけているか、提示した。

第Ⅳ章「徒弟的学習形態の生成過程にみる『学習』のリフレーミング：民俗芸能伝承クラブにおける『野火止の神楽』の囃子の活動から」では、博学連携による民俗芸能伝承クラブに参加していた小中学生が、神楽の太夫家による囃子の指

導のもとで徒弟的学習形態を受容していく過程を論じた。民俗芸能を伝承する指導者によって、本物の太鼓を叩く３名の担当者が固定され、参加者間で指導の内容や機会が差異化された。子ども同士の教え合いが起こる一方で、太鼓担当者への羨望などの対人葛藤も起きた。厳しい指導を一手に引き受ける太鼓担当者の役割と重責がクラブ内で理解されると、その地位は憧れの対象となり、徒弟的学習形態は受容されていった。この過程で子どもたちに葛藤や戸惑いが起きた前提には、子どもたちの日常的な活動が、機会の均等や体験の平等を是とする学校教育の「学習」に強くフレーミングされていることがある。子どもたちにおいては、学校の「学習」のフレーミングの自明性は徒弟的学習形態に遭遇したときに可視化され、民俗芸能クラブで活動するためにリフレーミングを要したといえる。

第二に、第Ｖ章と第Ⅵ章で、学級の活動システム内部の作用を論じた。

第Ｖ章「個性と学級文化の連動的生成にみるダブル･コンティンジェンシーの克服：小学３年生の詩の暗唱活動におけるレパートリーの形成過程」では、詩の暗唱活動において、対象児がレパートリーを形成する過程を追い、子どもの個性の生成と、学級文化の生成との相互交渉的なあり方を明らかにした。対象児が川崎洋（1981）の詩「魔女の天気予報」を独特の言い回しで暗唱し大変な好評を得た。すると、追随してその詩を暗唱する後続演者が出現し、最初の演者である対象児は「師匠」と仰がれる。レパートリー形成は詩に媒介される、演者と聴き手と後続演者との関係性形成の過程として示された。詩に媒介される相互作用は学級文化に状況づけられると同時に、学級文化を強化した。これを、自己と聴き手集団との行為の循環的な依存関係すなわちダブル・コンティンジェンシーの克服として論じた。

第Ⅵ章「発表活動におけるシステム内部の矛盾と内部観測による『問題』の出現と解消：『声が小さい』ことの問題化と『その子らしさ』の発見から捉える小学３年生の発表者の自立過程」では、活動システム内部の矛盾として顕在化された「問題」が、内部観測によって学級の相互作用が変容し「解消」されていくことを論じた。ある発表者の「声が小さい」という問題は教師による言語的物理的支援や聴き手の態度などによって可視化された。この時は、教師の仲介なくして発表者と聴き手は交流することができなかった。２学期になり、発表者とアーティファクトとの関わりに教師が「その子らしさ」という独自性をみいだし、評価実践を修正すると、徐々に聴き手の構えが変わっていく。聴き手から直接、発表者に要望が出されるようになると、直接的な相互作用が促され、「声が小さい」という当初の「問題」は解消した。「聴かせたい」「聴きたい」のに「聞こえない」という発表活動のシステム内部の矛盾から「問題」として「声の小ささ」が顕在化したが、内部観測から修正された。すなわち、「その子らしさ」という発表者の独

自性が気づかれると、教師の評価実践や聴き手との相互作用が変容し、「問題」が解消された。この点に、自己言及的なシステムの作動をみることができる。

第三に、第Ⅶ章と第Ⅷ章で、観察による名づけと意味づけを論じた。

第Ⅶ章「観察され名づけられる学級文化の二重性：小学２年生の学級における詩の普及とある子どもの関係性の変容」では、ある男児が取り組んだ詩人の詩が学級に普及していった現象について「学級文化」と名づけうることを論じた。自主学習において、対象児は金子みすゞの詩を年間通して継続的に暗唱していた。当初、その発表は形式的な反応しか得られなかったが、徐々に金子みすゞを発表する子どもが出現し、やがて対象児は共同演者として見込まれるようになった。２学期の後半以降、金子みすゞの暗唱件数は学級で急増し、対象児は優れた発表者として認められるようになった。金子みすゞの詩が学級集団に普及していくことと、詩に媒介されて対象児の関係性が変容することが連動していた。特定の詩人が圧倒的に支持され、学級独自の詩の用い方が生まれ、詩の嗜好性や象徴的表現、活動規範が学級で共有されるという現象について「学級文化」と名づけることが可能である。「学級文化」は学級固有の現象を指すとともに、その現象自体は調査者によって観察され名づけられ、研究課題化される点で、二重性を帯びる。

第Ⅷ章「意味づけられみいだされる『学習』：小学５年生の総合学習における子どもの参加過程の解釈的分析」では、総合学習に参加した対象児による一連の活動が、観察者によって自己言及的に捉え直されることにより「学習」という意味がみいだされることを論じた。食事の仕方を主題とする総合学習において、対象児は学級や地域や観察者といった社会的環境との相互作用によって彼なりの「学習」を形成した。その過程において、対象児は話し合い場面で茶々を入れるなど他児や教師と軋轢を起こしたり、一見粗雑な描写をしたりしていたが、文化による食べ方の違いなど実は自らの課題について彼なりに合理的に追究していた。それに対し、観察者は対象児のちゃかしや描写を自己言及的に捉え直し、対象児の一連の活動を「学習」としてみいだした。当事者と観察者の観察システムの交差によって、「学習」の生成が可能となった。

第三部「全体総括」

第Ⅸ章「総括的討論」において本研究の結論を述べた。

第一に、教育実践における「学習」は、アーティファクトや道具によって媒介される活動として形成される。主体は、アーティファクトに媒介されて対象と相互作用を行い、対象との関係性を変容させつつ活動を成立させる。並行して、活動の継続の中で、媒介物としてのアーティファクトもまた用いられ方が変容する。この意味で、学級における学習は、人間関係において生起し、関係性を変容

させるという点で社会的であり、その関係性において、コンテンツとの関わり方を変容させていくという点で文化的である。

第二に、上記の形成においては、活動システム内部の矛盾や差異、不安定性が変化の源となり、その調整が自己言及的になされ、活動の複雑性が縮減されることによって、「学習」がフレーミングされる。つまり、形成と並行して、自己言及的なシステムが作動している。

第三に、上記の一連の現象は教育実践の当事者の観察システムと、そこで調査を営む調査者の観察システムとの交差によって、事象として取り出され、意味づけられ、名づけられることによって「学習」となる。

第四に、したがって、学校の教育実践における「学習」とは、為されていない状態から価値あることが為される形成的側面と、学校という場で自己産出する社会システムとしての側面との相克として生成される。学習の形成には自己言及的システムが埋め込まれており、かつ、学習の自己言及的システムはその形成作用において可視化される。